

現代ケベックのネーション意識変容序論：  
「静かな革命」と雑誌の役割

Introduction à l'étude de la transformation de  
l'identité nationale du Québec moderne :  
La Révolution tranquille et le rôle des revues

佐々木菜緒  
SASAKI Nao  
仲村 愛  
NAKAMURA Ai

Résumé

Le présent article a pour objectif d'étudier la transformation de l'identité collective québécoise à l'époque de la Révolution tranquille. Notre but est de déterminer les conditions de la transformation de la conscience nationale de « Canadien-français » en « Québécois » qui eut lieu à l'époque. Certes, la Révolution tranquille est généralement considérée comme un point de départ pour décrire la société québécoise contemporaine. Mais sa représentation de nos jours est, semble-t-il, “mythifiée”. Il s'agit donc, dans notre travail, d'analyser trois revues d'idées sociales publiées entre les années 1950 et 1970, à savoir *Cité libre*, *Liberté*, *Parti pris*, pour répondre aux questions suivantes : la nouvelle identité québécoise, « depuis quel moment » et « comment » fut-elle mise en jeu ? Et par « qui » ? Parmi les changements sociaux qui eurent lieu pendant cette révolution, quels furent ceux spécifiques au contexte québécois ? Nous préciserons d'abord la mythification progressive de la Révolution tranquille et son caractère mythique. Ensuite, nous examinerons le contexte social de la fondation de ces revues et leurs thèmes spécifiques. Enfin, nous essayerons de chercher l'innovation de la notion « Québécois » à l'époque.

キーワード：「静かな革命」、ネーション意識、*Cité libre*、*Liberté*、*Parti pris*

Mots-clés : Révolution tranquille, identité nationale, *Cité libre*, *Liberté*, *Parti pris*

## はじめに

一般に「フランス系カナダ人 (Canadien-français)」のアイデンティティは、1960年代の「静かな革命 (Révolution tranquille)」期に、ケベック州のフランス系カナダ人に限定された「ケベック人 (Québécois)」へ変化したといわれる。この新しいネイション意識<sup>1</sup>は、ケベックにおける政治や経済、文学や芸術分野など幅広い近代化運動の根幹とみなされている (e.g. Jacques, 1998)。しかし、「静かな革命」期に生まれたとされるケベック人意識への理解は、現代ケベックを語る上で本質的問題であるにも拘らず、そのネイション意識が、〈いつ〉〈どのようにして〉用いられていったのか、そして〈だれ〉が使い始めたのかなど、その実態を明確にした研究はほぼ皆無である。

同様に、ケベック社会における一連の近代化改革の代名詞「静かな革命」は、あらゆる分野への絶大な影響力ゆえに、現代ケベックを語る上で不可欠要素として参照される。しかし一方で、その神話的側面も指摘されている (Jacques, 1998, p. 17)。つまり、「革命 (révolution)」ということばによって表されるように、どれほどに当時のケベック社会は劇的に変化したのか、或いは「静かな革命」に象徴される近代化は具体的にどこからどこまでを意味するのか、これらの問題は時を経るにつれて不明瞭になっているように思われる。

従って、今日「静かな革命」のイメージが1人歩きしている状況を考慮しつつ、ネイション意識変容の具体的過程を解明するためには、「静かな革命」前後の当時の言説を分析する必要がある。本研究は、1950-70年代を対象とし、当時を代表する3つの雑誌 *Cité libre*、*Liberté*、*Parti pris* を通じてこれらの問題を解明する取り組みである。50年代に創刊された *Cité libre* と *Liberté* は、その雑誌名に教権主義や権威主義からの解放の意図が表現されているように、所謂「フランス系カナダ」的精神からの断絶を50年代にすでに謳っていたように思われる。60年代に創刊された *Parti pris* については、その存在期間が5年と短いにも拘らず、「[[同誌による] 現象 [が] ケベックの知的歴史を根本的に特徴づけるもの」(Dupuis et Rondeau, 2013, p.31) と捉えられるのは、ケベックにおけるネイション観念を根底から覆したためである。

本稿は研究の第1段階として、「静かな革命」及びケベック人意識に関するこれまでの通説に問題提起を行い、それらを検討し直すことを目的とする。本稿の構成は以下の通りである。第1章では、「静かな革命」の神話性を明らかにする。まず「静かな革命」をめぐる歴史解釈の問題に触れ、その神話

性を指摘する。次いで「静かな革命」という表現の起源に関する通説に異を唱える。第2章では、当時の言説が表象されている文芸雑誌に焦点を当てる。まずケベック史における雑誌の役割を概説した後、*Cité libre*、*Liberté*、*Parti pris*の3誌の思想的特徴や創刊背景を順に検討し、現代ケベックのネイション意識の変容について探る。

## 1. 「静かな革命」再考

### 1.1. 「静かな革命」の定義と歴史解釈

「静かな革命」は現代ケベックの起点といわれる。これはケベック人の集団意識において重要な歴史的転換点とみなされ、「ケベック人アイデンティティの本質の母体の1つ」(Tanguay, 2003, p.130)とされている。「静かな革命」の一般的理解は概ね次の通りである。狭義には、1960-66年にケベック自由党のジャン・ルサージュ (Jean Lesage) 政権により断行された政治・社会的諸改革—水力電力の州営化、教育省設立、教育や医療の脱宗教化・世俗化など—を指す。広義には、ケベックの民主化、脱宗教化・世俗化、福祉国家化といった方向性の政策方針が各政権に概ね共有された60-70年代をいう。この時期にケベックのフランス系カナダ人の集団意識は「ケベック人」に変容し、この新たなアイデンティティの枠組みはあらゆる分野にすぐさま適用された。政治イデオロギー的には「ケベック国家 (État du Québec)」樹立の構想を含むナショナリズムが盛んになった一方で、文化芸術面においては新しいケベック人意識がネイションの文化発展への熱望と結びつき、文学、演劇、映画など様々な文化活動が一斉に花を咲かせた。

しかし、「静かな革命」には多くの疑問も残る。実際、過去半世紀間、「静かな革命」にまつわる問いが様々に提起されてきた。「静かな革命」とは果たして「革命」だったのか。「革命」だとすれば、どの点においてか。1960年代のケベックは「静か」だったのか。「静かな革命」以前の後進的なフランス系カナダ像は妥当なものなのか。こうした一連の問いに対する立場によって、「静かな革命」の歴史解釈も変遷する。

「ケベックの全ての歴史教科書において若い学生に常に語られている物語」は、本質的に農村カトリック社会だったケベックは「静かな革命」を通じて、近代世界の動向に対し開かれた脱宗教的・世俗的な社会へ転身したと語ってきた (Jacques, 1998, p.16)。この歴史解釈によれば、「静かな革命」はかつてケベック社会が備えていた構造的特徴—すなわち、「農村社会、教権主義、宗

教的なもの、覇権、文盲、外国人嫌い、変化の拒否、準封建的国家、自然出生率の高さ、手工業・家族経営型経済、前産業化時代の精神性」(Bouchard, 2005, p.416) —からの脱却、刷新として描かれ、そのためケベック史における断絶の時代として理解される。

しかし実際には、「静かな革命」を断絶としてのみ理解することに対して、歴史学界でも論争が続いている。「静かな革命」の解釈の変遷は、20世紀後半以降のケベックにおける歴史学説史上の流れとも相関している。70年代頃まではかつての後進性や劣位を強調し、60年代以降の近代化を断絶とみなす歴史解釈が支配的であった<sup>2</sup>。一方、70年代以降、ケベックの特異性を強調した歴史解釈を批判する歴史修正主義が台頭する (e.g. Linteau *et al.*, 1989)。例えばポール＝アンドレ・ラントー (Paul-André Linteau) らは、経済社会史のアプローチで19世紀からすでに産業化、都市化が進行していたことを明らかにし、「静かな革命」を「長期的な変容の中の決定的加速の瞬間」(Linteau *et al.*, 1989, p.809) と評価し、断絶的歴史解釈を批判する。歴史修正主義者は、他の西洋社会と比べてケベック社会はあくまで正常であると証明することに特に関心を抱いていた<sup>3</sup>。

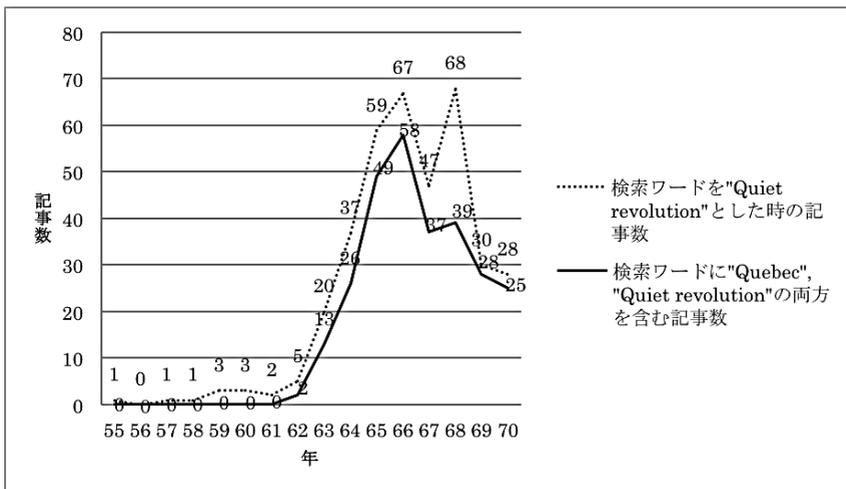
特異性と正常性を巡るこうしたケベック歴史学上の論争に伴い、「静かな革命」をケベック史の断絶と連続性のどちらと捉えるかという問題は未決着のままである。加えて特筆すべきは、「静かな革命」の評価を巡る歴史修正主義の立場が、歴史学以外の分野ではほとんど顧慮されてこなかった事実である。多くの分野において、「静かな革命」はケベックの近代化と無批判に結びつけられ、これを歴史的断絶として安易に扱う風潮が強い<sup>4</sup>。歴史解釈を巡る分野間のこのような温度差が示唆するのは、「静かな革命」の神話性である。「静かな革命」は、ケベックの集団的記憶の中で、近代化、脱宗教化・世俗化、ネイション意識の目覚めといった現象を説明するための参照元として象徴化されている。結局、これは1つのレトリックであり、「想像上の革命」なのではないか。もし「静かな革命」というものが存在するとすれば、「当事者の意識の中」或いは「論理を突然変化させた社会言説や集団的象徴の中」(Warren, 2001, p.19) にのみ見出されるものであろう。そこで、「静かな革命」がケベック史における神話的な集団的記憶であることが表象されていると思われる一例として、次節では「静かな革命」の起源にまつわる通説の信憑性を検討する。

## 1.2. 「静かな革命」命名の起源に関する神話

本節では、「静かな革命」の神話的側面について「*Révolution tranquille*」の表現の起源を切り口により踏み込んだ考察を行う。従来、同表現の由来はトロントの日刊紙 *Globe and Mail* の匿名の記者が当時のケベック社会の急速な変化を英語で「*Quiet revolution*」と表現したことにより、それがケベックに逆輸入されフランス語化された、と説明されてきた (e.g. Linteau *et al.*, 1989, p.421 ; Jacques, 1998, p.18)。アンドレ・ジェルヴェ (André Gervais) によれば、この通説の初出はケベック人政治学者レオン・ディオ (Léon Dion) の『次なる革命 (*La prochaine révolution*)』(1973年)である。だがそこには出典が明らかにされておらず、該当記事は未だ特定されていない (Gervais, 1998, p.115-116)。

そこで、同表現の初出の記事を確認するために、これまでその生みの親とされてきた *Globe and Mail* の過去の記事を検索してみると、同表現を含む記事は1950年代から存在することがわかった (図1)。さらに、この表現の使用が増加する60年代初頭の記事では、同表現はケベックの所謂「静かな革命」以外の文脈で英語系カナダにおいて幅広く用いられていたことが判明した<sup>5</sup>。こうした事実は、「*quiet revolution*」という表現が実は、北米とりわけアメリ

図1 「*Quiet revolution*」のみを含む記事と「*Quiet revolution*」、「*Quebec*」の両方を含む *Globe and Mail* 記事数の推移 (1955-1970)



出典：Proquest, Bibliothèque et Archives nationales du Québec, <http://search.proquest.com.res.banq.qc.ca>. (2015年12月19日閲覧) より筆者作成。

カ合衆国の新聞記者たちに当時よく使われていた表現であったという、社会学者ジャン＝フィリップ・ワロン (Jean-Philippe Warren) の最新の研究成果からも裏付けられる<sup>6</sup>。同氏によれば、同表現で形容される対象は必ずしも北米社会だけではない。「quiet revolution」とは、50-60年代のアジアからアフリカ、ヨーロッパからラテンアメリカに渡ってみられた制度、政治、経済面の改革や意識変革を表す英語表現だったのである<sup>7</sup>。

つまり「quiet revolution」は、元は小文字の表現であり、60年代前半のケベック州における諸改革や変化を指すためだけに生み出された特殊表現というわけではなかった。ケベックの「静かな革命」は当初、様々な「quiet revolution」の1つにすぎなかったのである<sup>8</sup>。また、「匿名の記者による記事」も発見されず、全て記名の記事である。これらの点を総合すると、「Révolution tranquille」の起源は *Globe and Mail* の匿名の記者により命名された表現であり、それがケベックに流入してフランス語化された、という通説は論拠が薄弱であるばかりか、誤謬が含まれていることがわかる。

このように、本節ではケベックにおける「静かな革命」表現の起源に疑問を付した。これは本研究のケベック史における「静かな革命」神話論への糸口をなしている。従って、同表現がどのようにして大文字化しケベック史の近代化の代名詞と化したのか掘り進めることが今後の重要課題であろう。だが、本節で繰り返し確認しておきたいことは、「静かな革命」と呼ばれる流れが50年代頃からの広い諸改革運動と結びついている点である。この点について次節以降、ケベックの雑誌史の文脈において吟味し直してみたい。

## 2. ケベックにおける社会思想と雑誌 *Cité libre*・*Liberté*・*Parti pris*

### 2.1. ケベックの雑誌史概観

本章で扱う3誌 (*Cité libre*, *Liberté*, *Parti pris*) を概観する前に、本節では20世紀ケベックの社会思想と雑誌の関連を確認する。

アンドレ・フォルタン (Andrée Fortin) がケベックにおける知識人と雑誌の関係を論じる中で、「人々は何よりも報道機関において自己を表現する」(Fortin, 1993, p.7) と指摘するように、ケベックにおいては「我々 (Nous)」の名の下での思想表明と雑誌の出版が密接な関係にある。19世紀から20世紀初めまでの雑誌にみられる自己表現は、何よりも「知識の拡散 (la diffusion des lumières)」や「フランス系カナダの発展」を目的とする啓蒙的かつ愛国的なものだった。この時期の雑誌はフランス系カナダとしての「我々」を主

張し、その歴史観を市民に浸透させることに努めていた。しかし1920年代以降、啓蒙的性格は後退し、代わりに「思想雑誌」(Fortin, 1993, pp.26-30)と呼びうるものが登場する。

第1次世界大戦頃、ケベック社会は国際情勢を意識し始める一方で、自分たちの文化的アイデンティティの問題にも関心を持ち始める。例えば、「真のケベック芸術を、少なくとも〈メイド・イン・ケベック〉の芸術を、ヨーロッパの芸術と対抗するのに値するものを」(Fortin, 1993, p.104) 求める声が強まった。徐々に、ヨーロッパ的な縁を想起させる過去ではないネイション意識を主張するようになる。同様に、ケベックにおいて文芸批評の活動が活発化するのも1900年代以降である(Allard, 1991, p.16)。当時、「芸術及び文学をもたない民は歴史を持たない」(Allard, 1991, p.30)との危機意識から、文芸批評の開発と発展が求められた。例えば、1934年に創刊された*La Relève*は、キリスト教的人間主義の下、ケベックにおける芸術及び思想発展のためにカナダ的思想(*une pensée canadienne*)の発明を目指した雑誌である<sup>9</sup>。哲学、教会の近代化・世俗化、文学の主題を主に扱った*La Relève*のように、1930年代の雑誌の特徴は、社会問題を経済的、政治的に解釈するのではなく、文化的或いは精神的観点でみる点にある。

1940年代には第2次世界大戦の影響を受けて、「純粋な人間主義(*un humanisme pur*)」(Fortin, 1993, p.138)の姿勢や思想を主張する動きがみられるようになる。この時期、雑誌は思想を広めるための場所であるだけでなく、思想を磨き合う場所となった。この意味において、知識人たちは雑誌を通して現状を説明づけ、その問題に解決方法を提示する役割を担う。換言すれば、彼らは雑誌を通じて社会参加をしていたのである。また、ケベック雑誌史の1940年代に重要な役割を果たした代表的なものは、*Amérique française* (1941年)や*Refus global* (1948年)などが挙げられる。前者は、文芸批評ではなく「何よりも文芸創作にあてたケベック的近代性に関する初の雑誌」(Fortin, 1993, p.140)であり、後者は教権主義を批判した「現代芸術家たちによる初の雑誌」(Allard, 1991, p.30)と位置づけられる<sup>10</sup>。両雑誌は、フランス系カナダの近代化の問題や知識人の自由を主張している点において、続く50年代の*Cité libre*と*Liberté*もある程度思想面において類似している。実際、50年代に創刊された雑誌の特徴は「知識人の自由、つまり公共の場に居合わせたいと願いを主張」(Fortin, 1993, p.145)することにある。

しかしながら、*Cité libre*の登場は思想面だけでなく雑誌設立のあり方にも

新たな姿勢を提起した。大戦中に経験を積んだ新しい世代、尚且つ、この新しい世代は単なる若者（des jeunes quelconques）ではなく、中流階級出身で高学歴の新エリート集団が雑誌を設立していることである。

彼らは、前述の *La Relève* よりも進歩的で社会参加への関心を明白に持ち、デュプレシ政権を批判しながら近代化の問題やネイションの問題を集団レベルで議論した。このように、一定の世代と階層の「我々」から成り立つ雑誌設立の背景は、その後の *Liberté* や *Parti pris* にも類似する。次節で各3誌を詳しくみていくが、その前に次の点を改めて確認しておきたい。すなわち、20世紀初頭からケベックの雑誌は、様々に近代性を問い、教会のあり方を問い、フランス系カナダであることを内的或いは対外的に問うてきた。こうした雑誌史を通してケベックにおける社会思想の変遷をみれば、思想面では「フランス系カナダ」との断絶が1960年代以前に既に始まっていたといえる。とはいえ、50年代まではそうした思想は少数派に過ぎなかった。その少数派の思想が一気に多数派に転じたのが60年代の「静かな革命」だったのである。

表1 *Cité libre*, *Liberté*, *Parti pris* 各誌の概略

	<i>Cité libre</i>	<i>Liberté</i>	<i>Parti pris</i>
創刊	1950年6月	1959年1月	1963年10月
発行期間	1950-1970；1991-2000	1959-現在	1963-1968年半ば
創刊者	ピエール＝エリオット・トルドー (Pierre-Elliott Trudeau, 1919-2000)、 ジェラルド・ベルティエ (Gérard Pelletier, 1919-1997)、 ピエール・ヴァドゥボンクール (Pierre Vadeboncoeur, 1920-2010)	ジャン＝ギイ・ピロン (Jean-Guy Pilon, 1930-)、 ジャック・ゴドブー (Jacques Godbout, 1933-)、 アンドレ・ペロー (André Belleau, 1930-1986)、 ミシェル・ヴァン・スカンデル (Michel Van Schendel, 1929-2005)、 フェルナン・ウーレット (Fernand Ouellette, 1930-) ほか	アンドレ・マジョール (André Major, 1942-)、 ポール・シャンペールラン (Paul Chamberland, 1939-)、 ジャン＝マルク・ピオット (Jean-Marc Poirte, 1940-)、 ピエール・マウ (Pierre Maheu, 1939-1979)、 アンドレ・ブロシュ (André Brochu, 1942-) ほか
主な編集委員・寄稿者	1950年代： レジナルド・ボワヴェール (Réginald Boisvert)、 フェルナン・デュモン (Fernand Dumont)、 マルセル・リウー (Marcel Rioux) ほか 1960年代： ジャン＝シャルル・ファラルドー (Jean-Charles Falardeau)、 ジャン＝マルク・レジェ (Jean-Marc Léger)、 ジャン・ペルラン (Jean Pellerin) ほか	～1960年代： ミシェル・ラロンド (Michèle Lalonde)、 ユベール・アカン (Hubert Aquin)、 ジル・マルコット (Gilles Marcotte)、 ナウム・カタン (Naim Kattan) ほか	イヴォン・ディオンス (Yvon Dionne)、 ピエール・ヴァドゥボンクール (Pierre Vadeboncoeur)、 ジャック・フェロン (Jacques Ferron)、 ジャック・ブロー (Jacques Brault)、 ミシェル・ピロン (Michel Biron)、 ジェラルド・ゴダン (Gérard Godin)、 ガストン・ミロン (Gaston Miron) ほか
思想・観点	政治的 自由（特に表現の自由）、反ナショナリズム、反デュプレシ、反教権主義、連邦主義	文化的 改良主義、国際主義、自由主義、進歩主義、国際色豊か、開放的	政治的、文化的 独立派、政教分離・世俗主義、社会主義、脱植民地化、脱教権主義、新ナショナリズム
発行部数	500部～（1950年代）； 1500～7500部（1960-66年）	最大3,000部	2,000～3,000部
読者層	労働組合員、学生、JECのリーダー OB、知識人、政治家、聖職者	作家、芸術家、学生、裕福な階級層	庶民階級層、活動家、学生、作家

(筆者作成)

## 2.2. 「〈静かな革命〉の哲学者」： *Cité libre*

雑誌 *Cité libre* は、政治、経済、社会の時事問題に特化した雑誌である<sup>11</sup>。同誌は「教権主義とデュプレシ主義に対する英雄的闘争の象徴、フランス系カナダの近代化の旗手」(Meunier et Warren, 1998, p.292)として、1950-60年代にかけてケベックのフランス系カナダ人の間で最も影響力をもった雑誌の1つである。そのため同誌は「〈静かな革命〉の哲学者」(Cook, 1995, p.113)とも呼びうる雑誌である。

同誌はピエール＝エリオット・トルドー (Pierre Elliott Trudeau) ら3名を中心として1950年6月に創刊された(表1)<sup>12</sup>。彼らはキリスト教学生青年 (Jeunesse étudiante chrétienne、以下 JEC) に関係する20代後半から30代前半の比較的若年の知識人であった。ペルティエによれば、同誌に携わったメンバーが抱えていた共通の問題関心は、デュプレシ政権が押し付けていた権威主義、保守主義、教権主義、非民主的な慣習からの解放である (Lamonde et Pelletier, 1991, pp.7-8)。中でも最重要課題とされたのは、表現の自由を回復することである。この点について、創刊号の冒頭文から具体的にみてみたい。

ここにいる私たち数百人は、数年前から、ある種の沈黙に苦しんでいる。だからこそ *Cité libre* が生まれるのだ (…)。ここにいる我々は皆、自己表現をする番がきた世代である。(…)しかし公の場で沈黙を破るのは容易ではない。(…)。もろもろの場への配慮、つまりいくつかの既存の雑誌を特別にひいきする者たちに認めてもらえるかどうか心配するせいで、様々な次元で彼ら [フランス系カナダの人々] は間違いなく窮屈に感じていた。(…)。*Cité libre* は、そうした者たち全員にとって、類を同じくする人々の家のような場、つまり各人が完全に自然状態で自己開示できる場でありたいと考えている。抑圧されることなくこのような環境を実現するためには、その家のような場が私たちのものである必要があったのだ。(…)。( *Cité libre*, 1950, pp.1-3)。

ここには、1950年当時、自分の意見を自由に表明することができない社会的空気があったことが示唆されている。「1960年より前は、今では信じられないほど権威の力が強かった」(Lamonde et Pelletier, 1991, pp.8-9)とペルティエが回想的に語っているように、デュプレシ体制下においては明示的にも暗示的にも検閲が行われていた。そのような中、「各人が完全に自然状態で自己開

示できる場」となるべく、ここに沈黙を破り、各人の表現の自由を行使するための場として *Cité libre* が創刊された。つまり、同誌創刊そのものが権威主義に対する反抗表明であり、また禁忌を破る象徴的行為だったのである。こうした行為は「静かな革命」の到来の前兆を予感させるものである (Lamonde et Pelletier, 1991, p.9)。

*Cité libre* は廃刊を迎えるまで何度か方向転換を行っている。1950-60年の最初の10年間は創刊理念が最も体現されていた時期である。この間はすべての寄稿者の間で、デュプレシ主義や教権主義からの解放という共通の問題意識が共有され、合意が保たれていた (Anger et Fabre, 2004, p.62)。同誌の黄金期は50-65年であり、この時期の同誌の反響の大きさは発行形態や発行部数にも現れている<sup>13</sup>。しかし、63-64年頃から編集者や執筆者の間で政治信条の違いから内部分裂が顕著となり、活動上の翳りを見せ始める。64年、主要メンバーを含んだケベック州の分離・独立支持派の約10名が一度に同誌から脱退し、翌65年にはトルドーとペルティエが連邦自由党へ加盟するために完全に脱退した。その結果、同誌は創刊当初の枠組みから変容していく。同誌の評価は様々であるが、広く読まれていたという点で非常なる成功を取めたといえる。前節の表1に示したように、同誌は様々な社会的地位の人々に読まれた。この点は特に後述の2誌と比べて際立っている。加えて、読者層だけでなく執筆者たちも多種多様な人々から構成されていた点も特徴的である<sup>14</sup>。その上、主要な執筆者の多くはテレビ討論番組などにも参加したため、一般の人々にとっても身近な存在に感じられた。

最後に、*Cité libre* の掲げる反デュプレシ主義や反教権主義はカトリック信仰を否定するものではないという点を強調したい。今日の「静かな革命」のイメージからすると逆説的であるが、同誌が企図したフランス系カナダの刷新プロジェクトはカトリック的遺産の完全な清算を目指すものではなかった。50年代の同誌の思想的基盤はキリスト教人格主義にあり、伝統主義や権威主義への批判は「合理主義や共和主義、ネオリベラリズムの哲学ではなく、刷新された、具現化された、真性の、カトリック信仰の名の下に」(Meunier et Warren, 1989, p.292 —強調筆者) 行われたものであった<sup>15</sup>。反教権主義の同誌の立場が決して反カトリックではない点は、後述の *Parti pris* の思想との比較において特に重要である。

### 2.3. 芸術の進歩主義者：Liberté

雑誌 *Liberté* は、ジャン＝ギイ・ピロン (Jean-Guy Pilon) を筆頭に 1959 年に創刊された。本稿で扱う 3 誌の中で唯一現存している<sup>16</sup>。同誌は何よりもケベックにおける文芸、芸術の発展を目指して創刊された文字通りの文芸雑誌である。そのため他 2 誌に比べて、ケベックのイデオロギー史の中で語られることははるかに少ない<sup>17</sup>。しかしながら、同誌の試みが「〈政治条件としての芸術〉企画」(Richard, 2011, p.20) であり、作家の社会参加を議論した雑誌である点において、当時の社会言説や文学言説の双方の観点から重要な雑誌である。従って、同誌は芸術に特化した文芸雑誌ではあるが、広い視点でケベックの雑誌史を考察する際に、また、当時の言説を検討する際には、軽視できない雑誌と言える。さらに同誌の特徴は、創立者が当時 30 歳前後の若い知識人作家であった点にも見出すことができる。このように同世代が集まって雑誌を創刊する傾向は、50 年代以降にみられる傾向である。例えば *Cité libre* は 30 歳前後、*Liberté* は多くが 30 歳前半、そして *Parti pris* が 20 歳代である。この時期、各雑誌の設立当初の年代層はそれぞれの世代及び階層を代弁している。

*Liberté* は、戦後国際的に湧いた「[[近代化に] 追いつくための切迫感、しかも文学界だけでなくそうした切迫した状況を主張する」(Fortin, 1993, p.161) 必要性を背景に、それまでの「〈思想の変遷〉を考慮に入れることを望」(Fortin, 1993, p.161) み、1960 年を迎える前から芸術分野の充実に寄与した雑誌である。この点について詳しく見るために、「創刊のことば」を以下に引用する。

*Liberté 59* は何よりもまずグループ活動の成果であり、フランス系カナダの境遇における切迫した要求に応えるものである。(…) 大学の雑誌や宗教団体発行の雑誌を除けば、現時点でここフランス系カナダには、思想の変遷つまりあらゆる形式での創造、あらゆる意思表明を通しての芸術生活の変遷を段階ごとに考慮に入れるような文芸雑誌及び文化雑誌が存在しない。(…) *Liberté 59* は国民雑誌であり、その目的のために、本誌はその出身がモンレアル、ウィニペグ、ヴァンクーヴァーなど、どこの出身であろうがカナダの知識人たちの協力を得ることを望む。(…) [ただし] 本誌は 2 言語雑誌ではないが、しかし英語を用いる私たちの仲間も翻訳原稿によって寄稿できる雑誌である (*Liberté 59*, 1959, p.1)。

最初に注目したいのは、雑誌の創刊背景として、当時のフランス系カナダには「文芸および文化に関わる雑誌が存在していない」ために、「フランス系カナダの境遇における切迫した要求に応える」ことが主張されている点である。言い換えれば、*Liberté*にとって急務なのは、フランス系カナダにおける広く普遍的な芸術文化分野の構築と発展なのである。そのため、文学のほか演劇や音楽、映画、絵画など幅広い分野に関する寄稿がなされている。

また、同誌はフランス系カナダを中心に、芸術一般について語る場として、あらゆる考えに開かれた雑誌である。例えば上記引用の後半部分に明記されているように、「本誌はカナダの国民雑誌」であり、「カナダの知識人」の協力のもと活動する雑誌であることが掲げられている。従って、ケベックにおいてフランス語で発行される雑誌ではあるものの、決して閉ざされた場ではなく、英語系の立場や考えも積極的に受入れる姿勢を持っている。実際、創刊当初から西洋全体の芸術分野への関心が見られる<sup>18</sup>。こうした開かれた議論が、60年代初頭から半ばにかけてのケベック人意識やフランス語への関心が高揚していた時期になされていたのである。この点において同誌は国際色豊かな先駆的で進歩的であったといえる。より政治イデオロギー色の強い *Cité libre* や *Parti pris* と異なり、*Liberté* が今日まで刊行され続け得た要因は、同誌が有するこうした自由で開放的な性質に起因していると考えられる。

#### 2.4. 革新家：Parti pris

最後の雑誌 *Parti pris* は、ルサーージュの改革真ただ中の1963年秋に、当時まだ学生だった20代の若者によって創立された。創刊者はアンドレ・マジョール (André Major) 他5名である (表1)。また *Liberté* の場合と同じく、後に文壇で活躍する作家や文学者が参加している。同誌が前者2誌と大きく区別されるのは、そのメンバーがより若い世代だったことに加えて、具体的な行動を伴った意思表示をしている点である。具体的な行動とはケベック独立実現に向けたものである。だがこの「ナショナリズム言説を一新する雑誌」(Fortin, 1993, p.169) は、ケベック史上で何度か登場したナショナリズムの雑誌の主題を概ね共有していた<sup>19</sup>。にもかかわらず *Parti pris* がケベック社会に衝撃を与えたのは、参加者の多くがサルトルやマルクスの愛読者であり、他のナショナリズム雑誌よりも理論的哲学をもって「文学及び政治的条件を作り直した」(Fortin, 1993, p.170) ためである。社会主義や脱植民地主義を理論的基盤として、彼らはまず「ケベックの民 (le peuple québécois)」と「ケベッ

ク社会 (la société québécoise)』 (*Partis pris*, octobre 1963, p.3) の構築を謳う。そして同誌は「やつら別のカナダ人と争う我々ケベック人をひっくくめて、フランス語系と英語系の闘争の土俵」 (Bélanger, 1977, p.63) に乗せようとしている点で<sup>20</sup>、何よりもまず革命的立場をとる政治的文芸雑誌なのである。このようにみると、同誌には、新しいネイション意識ケベック人の存在が強く見受けられる。以下、創刊理念が述べられた箇所を引用する。

(…) 我々にとって、分析や考察、発言は行動へのきっかけでしかない。つまり、社会変革のためだけに我らの社会について語らんとする。我らの真実、これを創造するのだ、未だ不確かな国やその国を構成する人々の真実を創造しながら。(…) [従って] 我々の立場は明白である。ケベックの政治的独立のために戦う、それは独立が我々の解放に不可欠条件だからである (…。) 最も重要なのは、次のものから解放することである。すなわち、ケベック内外ともに、経済的かつイデオロギー的に支配しているものや、我々の疎外につけこんでいるものから解放することである。(…) 宗教から解放された自由社会主義国家のために我々は戦う (*Parti pris*, 1963, p.2)。

最初に目を引くのは *Parti pris* の活動目的が *Cité libre* や *Liberté* と違い、「行動 (action) = 戦うこと (lutter)」に重点が置かれている点と、その行動が一心に独立に向けられていることである。同誌にとって、とりわけ *Cité libre* の活動は哲学的な問題に留まっており、彼らがいかなる国の構築を目指したもののなのか不明瞭な上、実践的でない。この点で *Cité libre* は *Parti pris* に強く批判された (Gauvin, 2013, pp.18-19)。後者はそれまでの雑誌とは違い、「もはや対話の美德を信じていない」 (Fortin, 1993, p.170)。それゆえ、*Parti pris* には *Cité libre* のような議論する場としての役割は認められない。また、ケベック社会解放の唯一の手段として独立を主張する点や、さらにその解放が「ケベック内外」の次元で主張されている点に注目したい。これは、かつての「フランス系カナダ」が多重に植民地化され搾取されていたとの考えに起因する。1つは、「カナダ」の表現に含まれた英語系による政治的、経済的搾取が、もう1つは「フランス系」に象徴されるカトリック教会支配や権威主義が問題視される。こうした否定的なアイデンティティと繋がりを断ち、解放されたものとしての新しい肯定的なアイデンティティとして「ケベック人」意識の構築が同誌における争点となった。

図2 *Parti pris* 1967年1-2月号の表紙



(*Parti pris*, janvier-février 1967)

また、これまで論じてきた同誌の思想は視覚的な観点からも確認することができる。図2は1967年1-2月号の表紙である。この表紙が示すように、同誌は1837年の愛国党の乱 (Rébellion des Patriotes) をケベック史におけるナショナリズムの原点として参照している。さらにその1837年を基準としてケベック史上の転換点が記されている<sup>21</sup>。愛国党の乱から30年後の1867年は英領北アメリカ法のもとケベックがカナダ自治領を構成する1州となった年である。これは *Parti pris* のようなナショナリスト

にとって屈辱の年を意味する。次いで愛国党の乱から100周年の1937年は、世界大恐慌を受けて社会主義言説の高まりや独立派雑誌の刊行が見られた時期に当たる (Linteau *et al.*, 1898, pp.107-121)<sup>22</sup>。同号の出版年である1967年は愛国党の乱から130年にあたる。そしてその節目の年に、「独立はいつなのか」と勢いのある問いかけがなされている。また、図2からもわかるとおり、*Parti pris* は全ての文章に小文字を用いる。雑誌名も、人名も、目次も、本文中の表題も、通常のフランス語運用において大文字表記が通例とされるあらゆる箇所が小文字で記されている<sup>23</sup>。雑誌全体が小文字で表記されることで、上から与えられる規範や制度から解放された庶民性や日常生活に即した立場を表明している。これは、同誌の対象読者が学者や政治家、知識人階級ではなく、労働者や一般市民、若い学生たちで、彼らを喚起する目的をもつ雑誌であることと関係する。「*Parti pris* はケベックの政治的、経済的状况を総合的に考察しただけでなく、そうした状況と象徴的生産及び日常生活を結びつけ」 (Bonenfant, 1973, p.8) た雑誌なのである。

他方、*Parti pris* が新しいケベック人意識の下、ケベック独立を何よりも第1目標として掲げていたことは、逆に発行期間5年の短命に終る要因となった。なぜなら、同誌はよくも悪くもこの「ケベック独立」の主張以外に求心力を持たず、政治的立場をめぐりメンバー同士に意見の食い違いが生じたからで

ある。しかし、ケベック社会の「現状認識の原動力として」(Fortin, 1993, p.172)、新しい主権国家ケベックのためのネイション意識を打ち立てたために、短命にもかかわらず、ケベック雑誌史及び思想史に大きな存在感を持っている。

## おわりに

本研究は、現代ケベックの集団的記憶とネイション意識の源泉を探るものであり、この点において、今後のケベック研究の深化に寄与すると期待される。本研究の最終課題は、本稿で扱った3誌の分析を通じて、現代ケベックのネイション意識の変容を実証的に検証することにある。この目的のため本稿は、「静かな革命」と現代ケベック人意識の形成にまつわる通説に対して一石を投じ、その問題解明に向けての足がかりを担っている。本稿を通じて、「静かな革命」に対する1960-70年代の評価がケベック人の集団的記憶の中に結晶化し、史実より解釈やイメージが先行した説を形成していることが明らかになった(第1章1節)。とりわけ、「静かな革命」という表現それ自身はケベック特有のものではなかったこと(第1章2節)や、ケベック史における近代化プロセスや「フランス系カナダ」を刷新する思想的態度は、所謂「静かな革命」とされる時期より前から始まっていたことが指摘された(第2章1節)。また、1960年代に影響力を持った3誌の比較を通じて、新しい「ケベック人」意識の誕生についても一枚岩では語れないことが分かった(第2章2-4節)。

しかしその一方で、本稿では3誌とも概略を示したのみで、具体的な言説分析をするに至っていない。雑誌 *Parti pris* が創刊当初からケベック人意識を前面に出していたことはわかったが、他の2誌がフランス系カナダ人からケベック人へとネイション意識を〈いつ〉、〈どのように〉変容させたかについては、紙幅の関係上論じることができなかった。これらの点については稿を改めて論じたい。

(ささき なお 明治大学大学院教養デザイン研究科博士後期課程)

(なかむら あい 明治大学大学院教養デザイン研究科博士後期課程)

## 注

- 1 本稿ではネイションを「ある集合体の政治的、文化的表象と統合に関する固有の様式」(Bouchard, 1995, p.77)と理解する。
- 2 中でも特にモンレアル歴史学派は大きな影響力を持っていた。

- 3 1990年代後半以降になると、歴史修正主義に対する批判が生まれ、ケベック史論に独自の諸要因を再評価する動きが再び登場する (cf. Bédard, 2006, pp.9-24)。
- 4 チャールズ・テイラー (Charles Taylor) やウィル・キムリッカ (Wil Kymlicka) のようなカナダ国内外で著名な政治哲学者でさえも、1960年代以前のケベックは専ら伝統的社会だったという見方を受け入れている (Cardial, Couture et Denis, 1995, pp.78-79)。
- 5 カナダ退役軍人、オンタリオ州の大学における科学技術教育、トロント市政におけるコンピューター導入などの記事を確認することができる (Lee, 1962 ; Spurgeon, 1966 ; Porter, 1967)。
- 6 2015年11月19日、コンコルディア大学にて行ったワロン教授との面会及びその際に頂いた彼の未発表の最新の論文により得た情報である。これらの情報について筆者が本稿で言及することについて、2015年12月18日付のメールで快諾を得た。
- 7 ワロンによれば、50年代当時、アメリカ合衆国における家事や料理の習慣の変化、精神病患者の医療方法の改善、キャンパスが人種により分断されていた米国大学における黒人の統合のほか、フランスにおけるドゴール政権の新憲法、日本における民主化など、戦後の世界的諸変革を指すのに「quiet revolution」が頻繁に用いられていた。世界的なこうした幅広い分野の変革には、戦時中に欧州から北米大陸へ移住したシュールリアリストによる平和主義及び民主主義運動との関連も指摘できる。本稿の注10も参照のこと。
- 8 「quiet revolution」は英語から生まれた表現だと考えられるものの、ケベックにおいても50年代に小文字「révolution tranquille」の使用が確認できる。一例を挙げれば、1950年の時点で、フランス-ケベック間の文化政策の協力関係の確立について「révolution tranquille」と表現する記事がある (Marcotte, 1950)。
- 9 本誌はその後 *La Nouvelle Relève* (1941-48) に改名する。
- 10 兩次大戦時期にケベックの芸術分野の近代化第一歩を踏み出した背景にはシュールリアリズムの影響がある。特に *Refus global* 宣言を発表したポール＝エミール・ボルデュア (Paul-Émile Borduas) は欧州のシュールリアリズムをより抽象的なオートマティズム運動として発展させ、ケベックの人々の精神的近代化の基盤を整えた。この姿勢は後の *Cité libre* や *Liberté* に引継がれる (cf. Bourassa, 1977)。
- 11 但し、*Cité libre* の創刊者たちの見解がその思想体系上 *La Relève* 或いは *La Nouvelle Relève* を引き継いでいるとする観点から、文芸雑誌の流れのなかで論じられることもある (Allard, 1991, p.50)。

- 12 *Cité libre* は 1970 年に一度廃刊になり、1991-2000 年に一時的に復活した。尚、研究の対象時期は「静かな革命」前後であるため、本稿で取りあげるのも 1950-70 年に発行された巻号とする。
- 13 黄金期の最大発行部数 7500 部は、例えば *Esprit* を始めとするフランスで有名な文芸雑誌と比較した場合、人口比ではこれらを上回る水準である (Lamonde et Pelletier, 1991, p.15)。尚、発行頻度について、1950-60 年間は年 2-4 回だったが、60-66 年間は年 7-10 回発行された。
- 14 ジャーナリストや人文・社会科学系の大学教授だけでなく、労働組合の幹部や聖職者も同誌に寄稿していた。
- 15 *Cité libre* におけるキリスト教人格主義の思想は、1932 年にフランスで創刊された雑誌 *Esprit* の影響による (Meunier et Warren, 1998 ; Anger et Fabre, 2004)。また、*Esprit* は前述の *La Relève* の創刊にも関係しており、現代ケベックの知的歴史及び雑誌史において重要な役割を果たした雑誌である (立花、2015、pp.63-64)。
- 16 1961-62 年の毎月発行時期を除き、基本年に 6 回発行されている。
- 17 数少ないケベックの思想雑誌に関する研究書では、*Cité libre* と *Parti pris* は必ず取り入れられる一方、文芸雑誌 *Liberté* が同じように考慮されることはほほない (cf. Bélanger, 1977 ; Fortin, 1993)。尚、表 1 に示したように、同誌の設立者はケベック文学史における主要な作家や著名な文学者である。
- 18 例えば、創刊号の書評欄で、シカゴオーケストラ交響楽団による CD 発売情報が見られる (Simard, 1959, p.68)。また 1960 年代半ば以降、ユダヤ系作家ナウム・カタン (Naïm Kattan) が定期的に加ナダやアメリカの英語系作家や作品について報告を行っている (e.g. Kattan, 1964, pp.53-66 ; 1965, pp.305-308)。
- 19 他のナショナリズム雑誌として例えば、1962 年創刊の雑誌 *Maintenant* (1962) や *L'indépendance* (1962) がある。
- 20 従来 of ナショナリズム雑誌では、社会問題の本質は精神的及び文化的なものとして解釈され、英語系が敵視されることは少なかった (Fortin, 1993, p.154)。
- 21 図 2 の各年号の下に書かれている文は以下の通り、「1837 : histoire et idéologie ; 1867 : merdemerdemerdemerdemerdemerdemerde ; 1937 : séraphin ou la dépossession ; 1967 : à quand l'indépendance ? 」。それぞれに思想の起点、屈辱感、思想復興の機会、独立への渴望の象徴的年代が見事に並べられている。
- 22 1937 年は当時ケベック社会に広まりつつあった共産主義を抑圧するために、デュブレシ政権が通称「施錠法」(Lois du cadenas、共産主義者の集会場を施錠し閉鎖する法令)を制定した年であり、その意味において注 21 に触れた「剥奪 « dépossession »」が問題視される。
- 23 但し、本文自体は規則に準じた書き方である。

参考文献

- Allard, Jacques (1991) *Traverses de la critique littéraire au Québec*, Montréal, Boréal, coll. « Papiers collés ».
- Anger, Stéphanie et Gérard Fabre (2004) *Échanges intellectuels entre la France et le Québec 1930-2000 : Les réseaux de la revue Esprit avec La Relève*, Cité libre, Parti pris et Possibles, Paris, L'Harmattan.
- Bédard, Éric (2006) « Présentation », dans Éric Bédard et Julien Goyette, (eds.) *Parole d'historiens : Anthologie des réflexions sur l'histoire au Québec*, Les Presses de l'Université de Montréal, pp.9-20.
- Bélanger, André-J (1977) *Ruptures et constantes. Quatre idéologies du Québec en éclatement* : La Relève, La JEC, Cité libre, Parti pris, Montréal, HMH.
- Bonenfant, Joseph (1973) *Index de « partis pris » (1963-1968)*, CELEF, Université de Sherbrooke.
- Bouchard, Gérard (1995) « La nation au singulier et au pluriel. L'avenir de la culture nationale comme « paradigme » de la société québécoise », *Cahiers de recherche sociologique*, n°25, pp.79-99.
- \_\_\_\_\_ (2005) « L'imaginaire de la grand noirceur et de la révolution tranquille : fictions identitaires et jeux de mémoire au Québec », *Recherches sociographiques*, vol. 46, n°3, pp.411-436.
- Bourassa, André-G., *Surréalisme et littérature québécoise*, Montréal, l'Étincelle, 1977.
- Cardinal, Linda, Claude Couture et Claude Denis (1995) « La Révolution tranquille à l'épreuve de la « nouvelle » historiographie et de l'approche post-coloniale. Une démarche exploratoire », *Globe : revue internationale d'études québécoises*, vol. 2, n°1, pp.75-95.
- Cité libre (1950) « Règle du jeu », *Cité libre*, vol. 1, n°1, pp.1-3.
- Cook, Ramsay (1995) *Canada, Québec and the Uses of Nationalism*, 2nd ed. Toronto, McClelland & Stewart Inc.
- Dupuis, Gilles et Frédéric Rondeau (2013) « Actualité de *Parti pris* », *Spirale : arts, lettres, sciences humaines*, n°246, pp.31-32.
- Fortin, Andrée (1993) *Passage de la modernité : Les intellectuels québécois et leurs revues*, Sainte-Foy, Les Presses de l'Université Laval.
- Gauvin, Lise (2013) *Parti pris littéraire*, Montréal, Les Presses de l'Université de Montréal.
- Gervais, André (1998) « D'où vient l'expression *révolution tranquille*? », *Bulletin d'histoire politique*, vol. 6, n°2, pp.115-122.
- Ian, Porter (1967) « Works department's quiet revolution: Computer trained to keep sharp

- eye on city's wear and tear », *Globe and Mail* (Toronto), 10 October, p.5.
- Jacques, Daniel (1998) « Révolution tranquille? », *Argument: politique, société et histoire*, vol. 1, n°1, automne, pp.16-28.
- Kattan, Naïm (1964) « Littérature américaine : Philip Roth », *Liberté*, vol. 6, n°1, janvier-février, pp.53-66.
- \_\_\_\_\_ (1965) « Les canadiens anglais découvrent le Canada français », *Liberté*, vol. 7, n°3, mai-juin, pp.305-308.
- Lamonde, Yvan et Gérard Pelletier (1991) « Introduction », dans Yvan Lamonde, en collaboration avec Gérard Pelletier, *Cité libre : Une anthologie*, Stanké, pp.7-16.
- Lee, Betty (1962) « The Quiet Revolution in the Canadian Legion: Almost unnoticed, the country's largest organization for former servicemen has reshaped its image », *Globe and Mail* (Toronto), 8 September, p.A4.
- Liberté 59 (1959) « Présentation », *Liberté 59*, vol. 1, n°1, janvier-février, pp.1-2.
- Linteau, Paul-André, René Durocher, Jean-Claude Robert et François Ricard (1989) *Histoire du Québec contemporain, Tome II, Le Québec depuis 1930*, Nouv. éd. rev., Montréal, Boréal.
- Marcotte, Gilles (1950) « Ringuet romancier », *L'Action nationale*, vol. 35, n°4, 1 janvier 1950, pp.64-76.
- Meunier, E.-Martin et Jean-Philippe Warren (1998) « La question sociale à la question nationale : la revue *Cité Libre* (1950-1963) », *Recherches sociographiques*, vol. 39, n°2-3, pp.291-316.
- Parti pris (1963) « Présentation », *Parti pris*, n°1, octobre, pp.2-4.
- \_\_\_\_\_ (1967) *Parti pris*, vol. 4, n°5-6, janvier-février.
- Richard, Robert (2011) « La mort du Canada français », dans Olivier Kemeid, Pierre Lefevre et Robert Richard (dir.) (2011) *Anthologie Liberté, 1959-2000 : L'écrivain dans la cité : 50 ans d'essais*, Montréal, Le Quartanier, pp.17-23.
- Simard Laurent (1959) « Chroniques : les disques », *Liberté 59*, vol. 1, n°1, janvier-février, p.68.
- Spurgeon, David (1966) « A science revolution: Ontario narrows the research gap », *Globe and Mail* (Toronto), July 11, p.7.
- 立花英裕 (2015) 「ロベール・シャルボノーとフランス・レジスタンス派との論争を巡って」『ケベック研究』第7号、50～66頁。
- Tanguay, Daniel (2003) « Une question sacrilège de Pierre Vadeboncœur », *Mens : revue d'histoire intellectuelle de l'Amérique française*, vol. 3, n°2, pp.129-147.
- Warren, Jean-Philippe (2001) « La révolution inachevée », *Argument : Politique, société et*

*histoire*, vo. 2, n°3, pp.16-27.

付記：本稿は2015年度明治大学研究知財・戦略機構〈若手研究〉の助成を得てなされた共同研究「静かな革命前後のケベック人意識—文芸雑誌にみるネイション意識と過去」の成果の一部である。また、2015年11月に実施した現地調査活動では、モンREAL大学のジル・デュピュイ教授及びマルティヌ＝エマニュエル・ラポワント教授、コンコルディア大学ジャン＝フィリップ・ワロン教授から力添えと貴重な助言を頂いた。